

# アンナ・フロイトの児童分析と自我心理学 —父フロイトから受け継いだもの—

中 野 明 徳

## 【要 旨】

アンナ・フロイトは、精神分析の創始者フロイトの子どもで、『児童分析入門』(1927)や『自我と防衛機制』(1936)を発表し「自我心理学」に力を注いだが、メラニー・クラインから批判され続けた。アンナは「児童分析」を専門化するために努力し、父が目指した精神分析は「総合的」心理学だと確信した。そこで精神分析をアカデミック心理学と合流させ、精神病理からの解明という父の方法論に、正常な「発達ライン」から評価する発達病理の方法論を加えた。

## 【キーワード】

児童分析、自我心理学、防衛機制、発達病理、発達ライン

## I. はじめに

ジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939、以下フロイトと記す) が創始した精神分析は、精神医学や心理学はもとより、社会学、宗教学など様々な人文科学に影響を与えた 20 世紀の知的遺産である。フロイトが 1900 年に発表した『夢判断』はその記念碑的著作で、1908 年ウィーン精神分析協会、1910 年国際精神分析協会 (IPA) が創設された。この頃から第一次世界大戦 (1914 - 1918) までに、Freud のもとに参集した者を第 1 世代とすれば、Jung, Adler, Stekel, Abraham, Ferenczi, Jones, Rank, Sachs, Eitingon, Lou Andreas-Salomé などがいる。

第一次大戦後フロイト自身によって分析を受けた者を第 2 世代とすれば、娘アンナ・フロイト (Anna Freud, 1895-1982、以下アンナと記す) の他に、Helene Deutsch, Heinz Hartman, もう少し若い人では Wilhelm & Annie Reich, Edward & Grete Bibring, Richard & Editha Sterba, Ernst & Marianne Kris がいる。そのほか René Spitz, August Aichhorn, Erik Erikson, Peter Blos, Dorothy Burlingham らもこの世代で、ベルリンで訓練を受けた者に Otto Fenichel, Hans & Jeanne Lampl, Ernst Simmel がいる。

離反者は、第 1 世代では Jung と Adler がいるが、第 2 世代では Wilhelm Reich である。第 2 世代は男女ほぼ同数で、ほとんどが創始者フロイトと同じくユダヤ人であり、彼らの中心的な関心はウィーンのアンナによって開拓された児童分析であった。しかし、1938 年にフロイトが英国に亡命する前後から、第 2 世代の多くが米国に移住したことで、第 3 世代が生まれ、女性、児童分析家、非医師がいずれも少なくなり精神科医が増大する。

本論文は、アンナがこうした変動の中で、フロイトの何を受け継いだのか、精神分析をどのように考えたのか、に焦点を当てたものである。それによって、精神分析の世界を知ることができるであろう。

## II. アンナ・フロイトの生涯

アンナ・フロイトの生涯について、Elisabeth Young-Bruehl (1988) 著 *Anna Freud: A Biography* を参照した。この詳細な伝記は、アンナと面識のあった人たちとの面接のみならず、アンナが文通した未公開の膨大な手紙が資料となっている。主だった文通相手は、父フロイトの他に、Lou Andreas-Salomé, Max Eitingon, Eva Rosenfeld, Dorothy Burlingham, August Aichhorn, Ernst Jones, Ernst Kris, Hans Lampl, Ralph Greenson などである。この伝記のほかに、Ernest Jones (1961) の『フロイトの生涯』も参考にした。(以下、下線は筆者による。)

### 1. 子ども時代

アンナは、父ジークムント、母マルタ (Martha, 1861 年生れ) の間に、1895 年ウィーンで末子として生まれた。きょうだいは上から順に、Mathilde (1887 年生れ、先輩の Breuer の夫人にちなむ)、Martin (1889 年生れ、Charcot 教授にちなむ)、Oliver (1891 年生れ、英雄 Cromwell にちなむ)、Ernst (1892 年生れ、Brücke 教授にちなむ)、Sophie (1893 年生れ) である。この家族に 1896 年、婚約者 (フロイトの友人 Schoenberg) を失ったマルタの妹 Minna Bernays が加わり、ミンナ叔母様 (Tante Minna) と呼ばれ、1941 年に死ぬまで一緒にいた。ミンナはマルタと違って、フロイトの仲間と自由に会話をして、フロイトと非常にうまくいった。アンナが生まれた 1895 年、フロイトは Josef Breuer と『ヒステリー研究』を発表しているが、翌年に父 Jakob が死んで、フロイトの母 Amalie が未亡人となった。この後フロイトは Fliess と接近して自己分析を始めた。

アンナにはマルタとミンナという 2 人の母親がいたことになるが、2 人とも彼女がいう「一次的養育者」(primary caretaker) でも「心理的母親」(psychological mother) でもなく、この役割をとったのはアンナが生まれたときに雇われたナースメイド Josefina Cihlarz であった。Josefine は Ernst と Sophie の面倒もみたが、彼女にとって一番のお気に入りにはアンナであり、アンナを安心させたのは Josefina の注目であった。後年、アンナは児童分析家となって、「家庭なき幼児たち」の面倒をみることになる。

アンナは幼年時、家族から Annerl と呼ばれた。6 人兄弟のうち下の 3 人は、フロイトが 47 年間 (1891 - 1938 年) 住んだ Berggasse 19 番地で生まれた。Martin と Ernst は遊び仲間であったが、Oliver は一人で知的な数学や絵描きを好み、最終的に機械工学に進んだ。Oliver は過度に清潔好き、几帳面で強迫神経症の症状をもっていたが、父の仲間による治療がうまくいった。アンナは Martin から水泳を習ったり、ハイキングに連れて行ってもらったりしたが、Ernst が最も安定していて好きであった。アンナは保護的で感受性のある Mathilde を尊敬していたが、Sophie には愛と嫉妬が入り混じっていた。Mathilde と Sophie は手芸が大好きで、Mathilde は後年、手製の織物を扱うブティックを経営した。

Sophie は母のお気に入りであり、男の子の中で母のお気に入りには Oliver で、彼はイタリア人のようなハンサムであった。母は Ernst がキノコ狩りの名人であることわかって評価するようになった。Ernst は自立しており建築家になった。母には Martin は最も難しい子であった。

フロイトは Sophie と Mathilde のもつ女の子らしさをほめた。Mathilde は合理性と人のよさを備え、古典を読む知的な学生になって、フロイトを喜ばせた。フロイトが Annerl をほめるところはやんちゃぶり (naughty) であった。アンナは『夢判断』の中に小さな少女として登場しており、家族の中では夢見る人、語り手、後に書き手の能力がある人と認知されていた。

Mathilde と Sophie の天職は結婚であった。Sophie はフロイトが尊敬する聖書とヘブライ語の

教授 Hammerschlag の美しい姪にちなんで命名され、アンナはその教授の知的な娘にちなんで命名されたもので、それぞれが命名通りの「美しさ」と「頭のよさ」をもって成長した。

アンナの学校生活は1901年、6歳から始まった。最初の私立小学校は Josefine と通ったが、2番目の学校（1903 - 1905）は1人で通学した。この間1902年、フロイトは教授の肩書を得て地位が向上した。アンナの友だちは医者の娘が多く、非ユダヤ人と知り合っても家に招待されることはなかった。きょうだいで学業が優秀であったのは、Oliver とアンナであったが、アンナはギムナジウムに行かず、姉と同じようにハイスクールに行った。そこでの成績はすべての科目で優秀 (*sehr gut*) であったが、フロイト家は娘の教育には保守的であった。

フロイトは自分の子どもたちに医学教育を勧めることはしなかったが、女性の精神分析家に共感しており、友人の娘にはこの領域を勧めていた。彼はアンナが14歳の時（1909年）に科学としての精神分析をはじめて紹介した。アンナはこの時のことを生き生きと覚えており、以来アンナは、ウィーン精神分析協会の水曜夜の会で図書室の隅にいることが許され、父と仲間の討論を聴いた。彼女は精神分析に魅惑され父と一緒にアメリカに行き、講演を聞きたいと思った。丁度その頃、マサチューセッツ州のクラーク大学学長 Stanly Hall から、フロイトと Carl Jung, Sandor Ferenczi, Ernest Jones, Abraham Brill が招かれていた。

## 2. 教師から精神分析家へ

1914年アンナは小学校教員の見習い試験に合格した。アンナは子どもに対する精神分析に関心があり、17歳の時にフロイト（1909）の *Analysis of a Phobia in a Five-year-old Boy*（ある5歳男児の恐怖症分析、通称 Little Hans）を読んでいた。この試験を受ける前に、咳の発作に長く苦しみ、イースターに父とイタリア旅行に行けなかったが、フロイトの患者であった Leo Kann と親しくなり、彼女に付き添われて英国旅行をした。Leo は Davy Jones と結婚したが、もう一人の Ernest Jones との三角関係に悩んでいた。Ernest Jones は当時35歳の独身で、ロンドンで精神分析協会を立ち上げるために忙しかったが、18歳のアンナに接近してきた。アンナは彼の関心が自分よりも父にあると疑い、父も反対してこの件は落着くが、Jones はその後アンナに嫌がらせをすることになる。

第一次世界大戦は Martin と Ernst に生命の危機に晒し、フロイトにはメタ心理学の総決算を促した。アンナは教師試験に合格後、父が努力していた精神分析のジャーナルの編集を手伝いたかった。この頃のアンナは空想や夢の中で、しばしば男性の役割をとっており、この性質は後に彼女の分析で最も重要なテーマとなった。彼女は女性らしくないことを十分に認識していた。アンナは約6年教職をついたが、生徒の目から見ると、生徒と同じような青い制服をいつも着ており、生徒を厳格で厳しくしつけたといわれる。後にアンナは、*Beating Fantasies and Daydreams*（叩かれる幻想と白昼夢、1922）の中で自身を検討する。叩かれるというのは偽装化されたマゾヒズムで、父から独占的に愛される喜びで構成されていると論じる。

1918年アンナは父と一緒にブダペストに行き、戦後初の国際精神分析会議に参加した。アンナは父の仲間と同じように、父に分析を受けようと思いはじめた。この頃フロイトは個人分析が精神分析家には必要であると主張していた。彼女は、分析期間中は教師を続け、その後精神分析への転向を計画していた。フロイトはこの会議で、精神分析の範囲を上流階級から「もっと広い社会層」へと拡大するべきだと講演したが、この考えを深く長く自分の信条としたのはアンナであった。新しい技法に「児童分析」があったが、フロイトはその可能性に気づいていなかった。

アンナは学校時代や教職時代に詩を書いていたが、内なる欲求から書いたものではなかった。しかし1918年に自身が分析を受けるようになって、詩を書きたい欲求に基づいて書くようになって

た。1920年 Sophieがインフルエンザのために、6歳の男子を残して亡くなった。この死によって、フロイトとアンナは職業的な関係を強めることになり、アンナは教職を辞め精神分析学会誌の翻訳に従事することになった。アンナの分析は1922年まで続き、この間 Hans Lamplとの恋愛もあったが、結婚に至らなかった。アンナの分析を知る「経過記録」はないが、彼女自身が記した数々の詩と『叩かれる幻想と白昼夢』の論文がある。この論文は実際にはアンナが最初に患者をみた6ヵ月前に書かれており、そのきっかけは1922年9月のベルリン国際会議に精神分析協会のメンバーとして出席したからである。

フロイト(1919)の論文 *A Child is being Beaten* (子どもが叩かれる) は、アンナの論文の出発点となっている。男性2例、女性4例が記載されており、その中の第5例が「生活するうえで優柔不断であるというだけの理由から精神分析を受けたもので、大まかな臨床診断をつけるとすれば、分類の対象にならないか、神経衰弱として片づけられるであろう」とあり、この例がアンナとみられる。当時彼女は教師になるか精神分析家なるか迷っていた。

アンナはフロイトが『子どもが叩かれる』を書きあげた5ヵ月後の1919年8月、中世に舞台を置いた短い物語『偉大なる子どもの時代の物語』を父に告げている。フロイトは、女性の「男性コンプレックス」について、父への近親相姦的な愛を回避しようとするとき、簡単に女性的役割を放棄すると述べている。アンナの4年に近い分析は当時としては標準からみて長いが成功し、彼女は幻想や白昼夢を書くという社会的活動に昇華することができたが、彼女の昇華の代償は持続的な禁欲主義であった。

フロイトは、アンナの分析中に母親の重要性、後に「前エディプス」(pre-Oedipal)と名づけられる生後最初期の重要性に気づくようになった。フロイトに幼児の最早期における母親の重要性を示唆した一人が、彼の友人 Lou Andreas-Salomé である。彼女はロシア生まれの光り輝く作家で、NietzscheやRilkeとも親しく、1912年ウィーンに来て精神分析を研究し実践も始めた。1921年フロイトは Lou Andreas-Salomé をウィーンの自宅に招き、彼女は6週間滞在した。アンナは彼女を事実上、2番目の教師として受け入れ、精神分析協会に提出予定の論文を討論した。61歳の Lou は母マルタと同じ年で、まさに母親のような分析者であり、アンナが人前で自分の理論を話す恐怖を克服できるように手伝った。アンナの論文『叩かれる幻想と白昼夢』は、1922年5月31日にウィーン精神分析協会において発表されたが、「この論文は、Lou Andreas-Salomé との数回にわたる討論後に書かれたものである」と謝辞が添えられている。

1923年秋、フロイトに口蓋の癌が見つかり、以後33回の手術を受けるようになる。アンナは詳しい記録を Eitingon や Lou Andreas-Salomé に送った。フロイトの病気は父と娘の絆を強め、アンナが母に抱いていた古い嫉妬の再生をもたらした。マルタは夫の病氣と孫の死のストレスから、胃の調子や片頭痛に苦しみ、ミンナは心疾患のため一年の多くを療養所で過ごした。

女性の嫉妬心と競争心は、フロイトが手術を受けた後、アンナが改めて1924-1925年に受けた分析の後に提出した最初の論文のテーマであった。1925年アンナがウィーン精神分析協会に示した短い発表論文は、*Jealousy and the Desire for Masculinity* (嫉妬と男性性を求める願望) であった。これは2人の女性の分析に基づいているが、このうちの1人は彼女と非常に似ている人である。フロイトは1925年 *Some Psychological Consequences of the Anatomical Distinction Between the Sexes* (解剖学的な性の差別の心的帰結の2,3について) を発表した。このテーマをアンナと Lou Andreas-Salomé は検討し、本論文はアンナがフロイトに代わってホンブルグ国際精神分析学会で発表した。

アンナの2番目の分析で、もう一つのテーマは「利他的な譲渡」(altruistic surrender) であった。これは、アンナ(1936)の2番目の本 *The Ego and the Mechanisms of Defense* (自我と防衛機制)

の中で、興味をそそる章になっている。アンナは、過度な善良 (overgoodness) や利他的な譲渡が、他人に対する禁止や危険な願望の投影であるとして理解した。

アンナはフロイトが病気になるまで3年間、児童や成人の分析をしていたが、その中にアメリカ人 Dorothy Tiffany Burlingham の子ども、Bob と Mabbie がいた。Bob は当時 10 歳で喘息もちであった。Burlingham は心理的問題を抱えており、1925 年にウィーンにやって来たが、アンナが Bob を引き受けてくれたので、他の 3 人の子どもも連れてきた。Burlingham 自身は Theodor Reik の分析を受けた。この家族の問題は複雑で慢性化していた。夫の Robert は外科医であったが、躁うつ病を患っており、アメリカの精神病院では治らず、Ferenczi に診てもらったが精神分析の適応ではなかった。それで Dorothy は子どもを夫の影響から離すことを希望したが、夫の父 Charles Cult Burlingham (ニューヨークの著名な弁護士で政治家) が反対した。Dorothy の父 Louis Comfort Tiffany は、ニューヨークに住むインテリア装飾家、ガラスデザイナーであった。

アンナは Burlingham 夫人と一緒にいることに大きな喜びを感じるようになった。Dorothy の母は Tiffany の 2 番目の妻で、彼女が 13 歳のときに亡くなり、Dorothy は家の中では望まれない居候の感じを抱いていたが、それはアンナも同じであった。アンナは同時に、もう一人の若い母 Eva Rosenfeld を受け入れた。Eva は 4 人の子どもを生んだが、2 人の男子を病死、女子を事故死で失っていた。それでアンナは Eva を慰めていたが、フロイトが病気になるまで、今度は Eva がアンナに手を貸した。アンナは Eva に児童分析のために、親から離れている間に住む一時的なホームを始めようと説得した。こうして Burlingham の子どもたちと母親たちは、アンナの家族のようになり、1929 年に Burlingham の家族がフロイトのアパートの上層に住むようになった。Eva は小さな学校を建てるために自宅の庭を提供した。アンナは Burlingham のために 2 番目の分析を手配し、Burlingham は精神分析家になることを希望したので、フロイトは訓練分析として分析した。Dorothy の姉は双子であったが、今度はアンナと Dorothy が双子の関係になった。

### 3. 精神分析と政治

アンナは、1924 年フロイトの私的な諮問委員会のメンバーに突然になり、1925 年ウィーン精神分析協会の委員会に加わり、訓練分析家になったが、まだ新米の分析家だった。フロイトの病気によって、控えめなアンナは、第 1 世代と第 2 世代の複雑な関係を理解し、協会へ深く参入することになった。

フロイトの病気は、1913 年に Jung が離脱したときよりも、決定的な王子のいないフロイトをリア王にした。1923 年 Rank と Ferenczi が *The Development of Psychoanalysis* (精神分析の発展)、その年に Rank が *The Trauma of Birth* (出産外傷) を刊行した。フロイトはその大胆な独創性を賞賛しつつも精神分析を短くかつ簡単にすることだけを考えたものとして批判した。1924 年のザルツブルグ会議で、Ferenczi とは合議ができたが、Rank は荒れてフロイトから離れてしまった結果、29 歳のアンナが委員会の 6 番目のメンバーになった。

1925 年 Rank がウィーンに戻ってきてフロイトと和解した。Rank はウィーン精神分析協会の副会長であったが、Paul Federn が後任になった。その年、Helene Deutsch が、若い分析家を訓練するためのウィーン精神分析研究所の設立を提案して所長になり、アンナは補佐することになった。Deutsch は 41 歳、Rank と同じ年であった。アンナはフロイトを自我理想としてその意思を結集するようになり、「私の関心は個々人にあるのではなく、全体として精神分析運動にある」という。

1920 年代のアンナの実践は 3 分の 2 が児童、3 分の 1 が訓練生を対象とし、訓練生の事例指導も行っている。1929 年の記録には、彼女は児童分析の訓練生を 5 人受け持ち、その中に

Dorothy Burlingham, Ernst Kris らがいる。アンナは August Aichhorn らと児童分析セミナーで教え、そのジャーナルは戦後、*The Psychoanalytic Study of the Child* として復活した。

児童分析の歴史は、フロイトの『ある5歳男児の恐怖症分析』(1909)を嚆矢とするが、Ferenczi は児童分析と精神分析的教育の両方に貢献し、彼の分析を受けた人に Melanie Klein がいた。フロイトは Lou Andreas-Salomé から、児童分析の中核的問題を知った。つまり、子どもには言語的な自由連想が欠けること、分析外の情報や分析を維持するためのサポートが必要なこと、急速な転移反応が生じること、である。第一次大戦後、アンナや Klein が児童分析を始めたころ、意見を交換する組織がなかった。

Rank の事件の頃、1924 年 Karl Abraham の分析を受けていた Melanie Klein が、2歳から5歳の子どもの対象にする「早期分析」(early analysis)の技法と6歳の強迫症事例 Ema を発表した。Klein の仕事は Rank のいう初期の不安体験と呼応するだけにウィーンに衝撃を与えた。アンナは Klein の児童分析の理論や技法に警戒し、自分の経験を拡張する 1927 年まで批判しなかった。アンナが考える児童分析は、*Introduction to the Technique of Child Analysis* (児童分析入門)に記載され、Klein とは別のアプローチが明確に打ち出されている。

1925 年に Karl Abraham が亡くなり、Klein はベルリンで自分の仕事は認められていないと感じて、1926 年イギリスに移住した。そのとき Klein は 44 歳、アンナよりも 13 歳上であり、想像力がたくましく、論争好きで野心的な理論家であった。Ernest Jones は Klein に自分の 2 人の子どもと妻の分析を約束しており、あらゆる面で彼女をサポートした。1927 年のシンポジウムで、Klein と多くのイギリスの支援者たちが、アンナの本を批判した。Jones が編集した国際精神分析学会誌でこのシンポジウムが公表されて、両者の児童分析の相違が明らかになり、非医師の精神分析家の問題が大きくなって、その後 55 年間にわたって議論されてきた。

両者間の中心となる議論は、Klein が、子どもの超自我は最早期から「不変の」構造をもって発達し、フロイトが主張するようなエディプス・コンプレックスの解消に伴い、両親への同一化の代わりのものではないと主張したことにある。Klein は、離乳という剥奪体験がエディプス・コンプレックスを引き起こし、超自我はそれとともに、生後1年の終わりか2年目のはじめに、子ども自身のサディスティックな衝動から生まれるもので、両親との同一化によるものではないとした。Klein は子どもと成人の超自我に本質的な相違はないとみて、児童分析は成人分析との差は小さいと主張した。アンナは子どもの超自我は成人とは違って外部(両親)の影響に依存しているので、児童分析は成人分析とは違うと主張し、両者の技法は劇的に相違した。

Ernest Jones はフロイトに、アンナの本には賛成できないこと、アンナには不完全に分析され抵抗が残っているに違いないと書き送った。フロイトが娘を養護し、娘の分析者としてフロイトの能力が批判されているという、この手紙に対して、フロイトは Jones の意図が議論から外れていると返した。フロイトは、幼児の自我理想(超自我)に関する Klein の見解はまったくあり得ないこと、精神分析のすべての基本的前提に矛盾すると伝えた。フロイトは Jones の非常に個人的な挑戦に対して特別に不満を述べなかったが、Rank の件のときに教えるべきだった教訓を持ち出して Jones に忠告した。フロイトのいう教訓は次のとおりである。

「2人の分析家の意見が異なった時、1人の誤った見解が、その人が十分に分析されていないために、その結果、科学を犠牲にしてまでも自分のコンプレックスに影響されているために生じているという推定は、多くの場合正当化されるであろう。しかし実践的な論争では、私はこのような議論は許されるべきではないと思う。というのは、それぞれの立場は議論を通してどちらが間違っているか判断せざるを得ないからである。それゆえに、一般的にはこうした議論をやめ、議論の違いのあるところに、さらなる経験が啓発されるようにするのがよいとされている。」

以後 Jones はこの話題をフロイトに持ち出すことはなくなったが、個人的にアンナには、父の影響を受けてエディプス・コンプレックスが未解決であると言いつづけた。フロイトは Klein に対して個人的な見解は公にしなかったし、なぜ Jones が Klein の見解に惹かれるのか、その解釈は彼に伝えなかった。フロイトの考えでは、Jones がアンナに敵意を向けるのは、1914 年アンナが Jones の求愛を拒否したからであり、Jones には彼自身の独創的な考えがなく、Klein の仕事を利用しようとしたと解せられた。

1926 年フロイトは、*The Question of Lay Analysis* (非医師分析の問題) を書いて、非医師に対して、自分の立場を変えようとした。フロイトは、精神分析が心的装置、幼児性欲、神経症のメカニズム、精神分析療法の目的と技法を明らかにし、何人も一定の訓練を受けることによって資格を得ない限りは精神分析を行うべきではなく、当の人物が医師であるかどうかは副次的なことであると主張し、精神分析は医学の専門分野ではなく、ずばり心理学なのであると述べた。

これに対して Jones は、フロイトの関心は娘の職業にあるために、この主張は偏っていると批判した。アンナは『児童分析入門』を英訳することで、非医師分析に貢献しようとしたが、Jones の反対で 1946 年まで英語版は出版されなかった。アメリカの医師分析家は非医師分析に反対したが、アンナの周辺には、Dorothy Burlingham を含めて保育士や小学校教師など、多くの非医師の訓練生がいた。ウィーン、ベルリン、ブダペストでは児童分析が増えて、アンナは自分の技法を徐々に修正していった。アンナとその仲間、Melanie Klein と同じように、6 - 10 歳の潜伏期よりも年少の幼児の治療も行うようになった。アンナの仲間 Berta Bornstein の仕事がアンナに児童分析の非分析的な準備期間を放棄させるようになり、防衛分析の技法が開発され、1936 年に公刊されたアンナの本、*The Ego and the Mechanisms of Defense* (自我と防衛機制) に結実する。ここでは、幼児が発達させる様々な防衛の順位が観察され、その順位で早期の防衛が思春期や青年期で発達されることを示した。しかし、超自我の発達の正しい認知と、分析によってどういう結果を生むのかという問題は残された。

アンナの教職経験は実践へと拡張され、分析を受けている子どもは、日々の社会生活に分析の経験が生かされる、精神分析的に運営された学校環境が必要であると考えられた。Dorothy の 4 人の子どもに対して、Peter Blos が教師として選ばれた。友人の Eva Rosenfeld の助けを借りて、アンナと Dorothy は学校組織をつくり、Blos の助手に Erik Homburger Erikson が加わった(中野, 2020)。生徒の中に、Ernst Simmel の息子の Reinhard がいた。Reinhard は Melanie Klein の分析を受けた経験があったが、アンナが受け持つようになり、早急な解釈は深いかもしれないが、治療効果は長続きしないことを確信した。

フロイトもアンナも、Ernest Jones が『児童分析入門』をこき下ろしたところに非難の中核があることを知っていた。フロイトは娘を養護したが、アンナは自分の児童分析の技法が、父が発展させた成人分析とはいかに違うかを強調した。問題は、Jones が指摘するような「分析されていない抵抗」が、アンナの工夫に制限を与えているかどうかであった。

技法や治療面で、アンナの未解決な父コンプレックスは明らかで、彼女の注意はエディプス期に向けられていた。アンナは Klein との戦いよりも父の「自我心理学」(ego psychology) を正常な発達へと発展させる方向に向かい、Burlingham と思春期に入った彼女の子どもに関心をもった。アンナは父の看護、秘書、仲間であると思ひ、両親はアンナの結婚がますます遠のくの案じた。1920 年代の後半になると、アンナの父コンプレックスがもはや葛藤ではなくなった。その理由は彼女の分析からであり、父の賞賛を獲得して父と仲間であることに満足したからである。他方で、Dorothy がアンナの強い重要な感情はいつも父に向けられていたことを理解し受け入れたので、アンナの子ども時代の非社交性が癒されていった。Dorothy への感情は、かつて Lo

Kann Jones に向けられていたものであった。アンナの成長は、後に提唱する「発達ライン」へと発展する。

『児童分析入門』以後、アンナの関心は思春期に移った。Dorothy の子どもたちは、ウィーンに来て以来10年たち青年期に達した。フロイト (1934) が *Moses and Monotheism* (モーセと一神教) を書きあげた頃から、アンナが書き始めた『自我と防衛機制』は思春期を考えるための理論的基礎であり、まさに「自我心理学」の一つであり、アンナが自分自身になること (being I) を意味した。フロイトは『モーセと一神教』で、神経症のプロセスと宗教的出来事の類似性を述べ、宗教はトラウマが起きたときの幼児性を持っていると述べた。アンナの『自我と防衛機制』は、初期のトラウマから神経症発症までのプロセスを扱っており、ユダヤ人の歴史は、個人ではなく集団でつくられた防衛機制の歴史であるといえる。

『自我と防衛機制』が完成した1936年は、フロイト80歳の誕生日の年であった。フロイトはアンナの誕生プレゼントを喜んだが、顎の手術を受けねばならなかった。アンナは喜びもつかの間、新しいプロジェクトに取りかかった。フロイトの被分析者であり、アンナから児童分析の訓練を受けた Edith Jackson の寄付により、アンナは2歳児以下のための保育所をつくり、「実験」をしたかった。実験とは、発達を観察し、回顧的に成人の発達を再構成し、幼児の内的生活を児童分析の立場から資料を収集することである。Jackson 保育所は、12人の幼児を受け入れて1937年に開園し、アンナの正常な発達の研究が始まった。この年、Dorothy は結核が診断され、アンナの自我理想だった Lou Andreas-Salomé は76歳の生涯を閉じた。

1938年3月ウィーンはHitlerによって占領された。Ernest Jones はロンドンからウィーンにやって来て、フロイト一家が英国に移住するように説得した。ギリシャ王妃 Marie Bonaparte はパリから来て一家を保護した。フロイトの患者だったアメリカの大使 William Bullitt も交渉にあたった。ウィーン精神分析協会は、会員はできるだけ早く避難すること、将来の本部はフロイトが居る所にする と決定した。6月4日フロイト、マルタ、アンナ、Josefineなどを乗せた列車はパリに向かい、そこで王妃 Marie Bonaparte、国王 George、Ernest Jones らが迎えた。その日の午後、フロイト一家はロンドンに旅立ち、Dorothy はスイスに逃れた。

#### 4. ロンドン生活の始まり

Ernest Jones は、フロイトの伝記を書くにあたって、フロイトとマルタの手紙を読んで感動した。彼は伝記を書くにつれて、アンナについて深く理解できるようになり、彼女に対するアンビバレンスは解消した。アンナの強さの源泉に「利他主義」(altruism)があった。

1938年初夏、フロイトの癌は再発し放射線による切除が数週間にわたって行われた。ロンドンでもフロイト親子は患者を分析し、最後の努力をふりしぼって、*Outline of Psychoanalysis* (精神分析学概説)を討論したが完成できなかった。これはMelanie Kleinを批判する論文になるはずであった。

1939年2月フロイトの癌は悪化した。主治医 Max Schur とアンナはイギリスの医者を用いられなかったので、Marie Bonaparte の取り計らいで、放射線治療が行われたが、6月までに癌の進行を止めることはできなかった。9月にはいって、フロイトの容態は悪化しベッドから離れることができなくなり、9月21日フロイトは痛みから Max Schur にモルヒネを要求し、9月23日フロイトは昏睡から覚めることはなかった。

フロイトの死後、ウィーンから外国に亡命した移住者にとって、アンナは引力をもつ知的センターになっていった。アメリカに移住するよりも小さなイギリスに居る方が、Melanie Klein がいても、エネルギーを使わなくて済むとアンナは考えるようになった。1940年 Dorothy はロ

ンドンに戻ってきたが、1941年ミンナが亡くなった。Dorothyは、慈善事業である、「戦争孤児のためのアメリカ里親計画」(the American Foster Parents' Plan for War Children)をイギリスに持ち込む努力をし、里親計画協会が1941年から「ハムステッド戦時保育所」(Hampstead War Nursery)に多大な援助をするようになった。これによりアンナとDorothyとの間に深いパートナーシップが築かれた。ここの実践理論はウィーンで非行や非社会的な子どもを扱ったAugust Aichhornのもので、性格形成上、初期の育児を重視した。1944年活動記録*Infants Without Families* (家庭なき幼児たち)が出版された。

アンナは水曜日セミナーを開催し、ハムステッドで訓練をしていたが、英国精神分析協会のMelanie Kleinグループが反対した。戦時中、ウィーンからの移住者が増えるにつれて、両派の争いが激しくなった。Ernest Jonesは移住者を助ける一方で、アンナを中傷しKleinをなだめるという態度を取ったが、この両面作戦はうまくいかず、協会の実権の多くをSylvia PayneとEdward Gloverに譲った。PayneはKleinianではないがKleinに同情的で、GloverはKleinの娘でありながらKleinを批判したMelitta Schimbergを分析した人である。こうしてイギリスの分析家たちは複雑に分裂して戦う状況になり、協会は混沌とした政界の様相を帯びた。

1934年のルツェルン国際会議が、FreudianとKleinianの第二次論争の始まりで、古い理論の相違が新たに深まり、移民という新しい要素が古い政治的-理論的同盟を変えた。Melitta Schimbergは1929年に母親から離れて、ウィーンのアンナの下で研究したが、不節性にもアンナを批判する論文を書くような人で、その後母親を批判するようになった。この国際会議でMelanie Kleinは、*A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States* (躁うつ状態の心因論に関する寄与)を発表して、1932年の*The Psychoanalysis of Children* (児童の精神分析)の刊行に続く新たな出発をした。ここでKleinは「幼児の抑うつポジション」の概念を提出し、これが1930年代、40年代の議論的になった。ルツェルン国際会議は、アンナを理論的にも政治的にも疲弊させ、国際精神分析協会の事務局長の地位をEdward Gloverに譲った。

ルツェルン国際会議の後、Melanie Kleinの論文が広がるにつれて、イギリスでのKleinianの地位は下がった。Ella Sharpeは、1年間Melitta Schimbergを分析したことがあるが、Gloverと同じようにKleinから離れた。John Bowlbyは、英国軍での精神医学に関わるにつれて独立の道を取った。Kleinの支持者であった、Susan Isaacs, Joan Riviere, Donald Winnicott, James & Alix Stracheyなどは距離を取るようになった。Kleinに対しては、自分たちの理論がすべてをカバーでき、その妥当性は自明であるという主張に批判が向いた。アンナに対しては、精神分析はフロイト家に属しており、Kleinの考えは危険であるという主張が批判された。それにもかかわらず、Kleinは自分の理論はFreudianであり、アンナ以上にFreudianであると主張した。かつてフロイトから離れたAdler, Jung, Rankらの男性分析家は、フロイトが生きているときに論争したのであり、フロイトにとって娘を保護するという恐怖はなかった。ところが、Melanie Kleinはフロイトの死後、自分こそフロイトの『制止、症状、不安』を発展させた後継者だと主張したのである。こうなるとアンナは父の理論を変えることに不寛容になり、こういう状態が1940年の後半まで続いた。

アンナは一旦訓練委員をやめるが、返り咲くときに、「分離するが平等に」(separate but equal)を基本方針とした。アンナの提案は、2つの訓練プログラムをつくり、一つは研究所に、一つは彼女の後援下に置き、どちらも3年制のカリキュラムを有するというものであった。この提案は、John Bowlbyの下で検討され、Freudian、Kleinian、中間グループのすべてが同意した(1946年)。つまり、コースAは研究所(Institute)で行われ、一つのクラスはKleinianが教え、もう一つのクラスはすべての派閥の分析家が教え、コースBはアンナと関連した分析家が教え

るというものである。

1945年 Ernst Kris が「本当の Freudian の精神分析」を訴える MEMORANDUM (覚え書き) を発表した。Kris は 1938 年からアンナの分析を受け始めた人であるが、1936 年以来アンナのサークルから臨床的、理論的な論文がなく、「ハムステッド戦時保育所」の所見はまとまった知識になっていないと主張した。訓練が理論や臨床を公式化するプロジェクトを受け継いでいくべきものであって、研究所に頼るものではない。訓練を受けたいという多数の中から、最も信任できる人が「フロイトの遺産」(the Freudian heritage) を受け継ぐ人に選ばれ、教育されるべきだという。この覚え書きはアンナに戦時保育所の仕事をまとめることを促し、この成果は『ハムステッドにおける研究』となった。さらに、アンナはグループを英国精神分析協会から独立し、国際精神分析協会の政治からも独立して存在する道を選んだ。

## 5. フロイトの亡き後

1945 年以後は、アンナにとって、失われたものをどう埋めていくかという喪の仕事と自己分析の時期になった。1945 年 August Aichhorn はアンナにウィーン精神分析協会を再開したいと言ってきた。1945 と 46 年は Dorothy の結核の状態がおもわしくなかった。1946 年アメリカに移住した Otto Fenichel が 48 歳で亡くなった。彼は Ernst Kris とフロイト著作集の英語版を出版したいと考えていた人である。

1946 年 5 月 6 日はフロイト生誕 90 年記念日で、アンナのグループがお祝いに駆けつけた。Marie Bonaparte は戦前に買い取ったフロイトの Wilhelm Fliess 宛の手紙を持参してパリからやって来た。アンナはその手紙の歴史的価値がとてつもなく大きいと確信したが、父の出版すべきでない命令をどこまで無視できるか悩んだ。この手紙は、Ernst Kris の詳細な解説をつけて、短縮版で出版された (1954 年)。アンナの自己分析的な手紙は、Fliess ならぬ Marie Bonaparte が受け取り続けた。彼女のたくさんの夢も Marie Bonaparte に送られた。その中に、*About Losing and Being Lost* (失うことと失われること, 1953) というエッセイがあり、これは 1967 年まで公表されなかった。

1949 年 Aichhorn (71 歳) が亡くなった。彼はフロイトの死後、精神分析の歴史を知る重要な人であった。1951 年には母マルタ (90 歳) が亡くなった。アンナはこれまで父に同一化して、母に嫉妬していたが、両親が婚約中の手紙を読んで、これまでもつことがなかった母に対して良い感情がわいた。母の死によって、アンナは 56 歳にして、長く待ちわびた Dorothy との生活に踏み切った。アンナにとってアンビバレントな友人である Ernest Jones が 1946 年にフロイトの伝記を書きたいと言っていたが、1953 年フロイトの 1900 年までを扱った第 1 巻が出来上がり、アンナは喜んだ。Jones の『フロイトの生涯』の扉に、「不滅の人の忠実な娘アンナ・フロイトに」と書かれている。

訓練に関して、1946 年に英国精神分析協会にて妥協し、翌年アンナグループはハムステッドに児童治療者養成コースを開設したものの、長年の夢であるクリニックをつくりたかった。幸運なことに、アメリカの Kurt Eissler の多大な支援があり、1952 年ハムステッドにコースとクリニック (Hampstead Course and Clinic) を開設した。クリニックには治療室が 6 つ、プレイルーム、事務室、図書室、訓練生のための教室があり、母子同時分析も行われた。Burlingham がケースのスーパーバイズや研究の統括を行い、アンナはプロジェクト研究に専念した。

アンナのクリニックをアメリカが支援するというのは、過去からの反響の結果であった。1909 年クラーク大学がフロイトを招待したが、今度は大学 60 周年記念として、アンナに名誉博士号を授与したいという申し出があり、1950 年 4 月アンナは訪米して次のような講演をした。

「父とその仲間たちが精神分析の基本をつくりあげたが、アカデミック心理学との交流は広くない。友好関係はアカデミック側からやってきたが、特にアメリカでは、精神分析は広く深くアカデミック心理学の理論や研究の中に合流してきた。1940年代になってやっと精神分析は、アカデミックな実験や統計的な技法を用いる努力を始めた。」

1956年5月6日はフロイト生誕100年記念日であった。アンナは一連の講義をまとめて、*Normality and Pathology in Childhood* (児童期の正常と異常, 1965) を刊行した。James Strachey は妻の Alix と共にフロイト著作集の翻訳、*The Complete Psychological Works of Sigmund Freud* (通称 *Standard Edition*) を着々と進めて、アンナは膨大な23冊を読んではチェックした。ニューヨークでは、Kurt Eissler が Sigmund Freud Archives を組織して、フロイトに関連した手紙や記録を保管するプロジェクトを提案した。

100周年記念はアンナにとって精神分析の歴史を振り返る機会となった。アンナが確信したのは、父が目指したのは「総合的 general」心理学であって、ミステリーを解き明かすための科学的な理論や実践として扱われることを拒否していた、ということである。フロイトは、新しい道を切り開き、新しい理論を取り上げるときはいつも注意深く、創造したものを全体的にみて、どれだけうまくいくかどうかは別として、一貫性があるように組み直し、しかも新しい視点があるように試みた。アンナが父の『制止, 症状, 不安』を読んだ時、ある固定化したシステムを目指さなければ体系化は可能であることを理解したが、そうした試みは父の死後にのみ、彼女の世代の研究によって可能であると認識した。

そこでアンナは、精神病理の解明から正常についての推論という父の方法論に、正常な発達の複雑な描写から精神病理と治療法の評価をするという方法論を追加した。フロイトは自分の方法論で infantile neurosis (幼児神経症) を発見したのであるが、アンナは正常性 (normality) を測定する方法で精神分析理論に新しい視点を加えた。アンナは、この視点を父の *Beyond the Pleasure Principle* (快感原則の彼岸) になぞらえて、*beyond the infantile neurosis* (幼児神経症を越えて) と呼び、「発達病理」(developmental pathology) を見出した。この観点は、ハムステッドの戦時保育所やクリニックから得られたもので、エディプス葛藤による幼児神経症に当てはまらない「非定型」(nontypical) のケースを観察したからである。さまざまな「境界例」(borderline cases)、たとえば自閉症との境界、知的障害との境界、非行との境界、性的逸脱との境界などがあり、これらは伝統的な基準で分類できなかった。ハムステッドでは、メタ心理学的ラインと「発達ライン」(developmental lines) の結合的な見方による評価が許された。

アンナは、発達病理の概念を定式化する以前、生後1年にみられる精神内界で起こっている出来事を Klein が強調することに対して賛同できず、「抑うつポジション」のような内的出来事を再構成しても、その正しさは証明できないと否定的に言うだけであった。しかし、アンナは生後1年に観察できる、多数の発達の段階に焦点を当てるようになり、不確かな対象関係よりも、観察から評価するようになった。残念なことに、Klein に意見を言うことはなく、彼女は1960年に78歳で亡くなっていた。アンナの発達病理の概念は、Michael Balint のいう「基底欠損」(basic faults) の概念から引きだされたものである。Balint は、抑うつポジションには傷ついたナルシズムの傷があるとみた(中野, 2016)。それと Aichhorn の弟子であった Margaret Mahler がニューヨークで行った幼児の観察研究によっている。それより古くは René Spitz の研究がある。しかし Mahler や Spitz の研究はアンナの視点よりも狭い。アンナの発達ラインの概念は、Klein の対象関係論でいう「部分対象」(part objects) を組み込んだものであるが、Klein の仲間に従うことは拒否した。

1965年までに、クリニックは43名のセラピストと30人の職員を抱えるほどになった。この

時期の訓練は児童分析と成人分析が分かれており、児童分析が精神分析の理論と実践に貢献しているにも関わらず、児童分析家の資格が公的に認められていなかった。英国精神分析協会との協定で、ハムステッドでは訓練生に成人分析を提供できなかった。

1971年にウィーンで国際会議が開かれ、アンナが生まれ育ったウィーンのアパート (Berggasse 19) を博物館にすることになった。その前に Martin は 1967 年に、Oliver は 1969 年に、Ernst は 1970 年に亡くなっており、家族の終焉を意味した。Ernst の死の直後、ニューヨークで Heinz Hartmann が亡くなった。ウィーン国際会議は、アンナにとって満足のいくものではなく、ハムステッドの訓練がそのまま IPA が認める訓練とならなかった。英国精神分析協会は、ハムステッドが独立した養成機関になることを恐れたのである。

アンナはフロイトと Jung の書簡 (1974 年公刊) を読み、父が Jung に失望したのをみて、精神分析の過去と将来、誰が関わるかについては公言しないことにした。そこでアンナは父の手紙を公にすることにした。1978 年、アンナのクリニックの支持者である Kurt Eissler の弟子、Jeffery Masson から、父の Wilhelm Fliess への手紙を編集し直したい申し出があった。Masson は、フロイトが 1897 年に患者が誘惑されたという考えを放棄したことが大きな過ちだと宣言したことから、アンナにとっては厄介なことになったが、1985 年に公刊された。

1977 年 Mathilde が亡くなり、1979 年、50 年以上連れ沿った Dorothy が 88 歳で亡くなり、アンナは未亡人ようになった。その年、チャウの子犬を飼い始め、Jo-Fi と名づけた。それはウィーン時代、Dorothy がフロイトにあげたチャウの名前であった。アンナの被分析者であったアメリカ人 Alice Colonna と、ドイツ語を話せる保育学校教師を引退した Manna Friedmann がアンナの世話をした。アンナの死後、フロイト博物館をロンドン (20 Maresfield Gardens) に移そうという話はアンナと父を傷つけるものであった。1982 年 3 月小脳出血があり、アンナの歩行や会話に影響がでて、10 月 9 日アンナは 86 歳の生涯を閉じた。

### Ⅲ. アンナ・フロイトの著作

アンナ・フロイトの業績は、邦訳『アンナ・フロイト著作集 10 巻』(原著は全 7 巻)によって、その全貌を知ることができる。中村 (2018) による簡潔な紹介があるが、ここでは著作集にそって概要を総覧する。

#### 1. 児童分析入門 (1922 - 1935)

第 I 部「児童分析に関する 4 つの講義」(1927) は、Klein の児童分析に対するアンナの回答の意味がある。アンナの主張は以下のとおりである (中野, 2009)。

子どもは未熟であり依存せざるを得ないものであり、分析の目標もわかっていないので、技法が大人と同じではいけないのは明らかであり、子どもの遊びの象徴的意味は疑問である。子どもを分析するためには大人とは比べものにならないほど、陽性の関係が必要であり、また分析をしながらも、再教育とも呼ばれる目標を併行して追求しなければならない。子どもが分析家に陰性感情を持つ場合、基本的に治療は妨げられ、陽性の愛着がみられる場合のみ治療効果が発揮されるので、子どもを分析にまじらせるための導入期には時間がかかる。

子どもは転移神経症を形成することはない。というのは、子どもにとって愛情関係の複製をできる準備はできていないし、愛情の原対象、つまり両親はまだ愛情対象として現実に存在しているので、分析家をすっかり両親の代わりとする必要がないからである。家庭で愛情をかけられることもなく育った子どもが陽性の関係を作りやすいのは、分析家から何かを得ようとしているに

表. アンナ・フロイトの年譜

西暦	歳	出来事
1895	0	12月3日アンナ誕生、フロイト『ヒステリー研究』発表
1901	6	学校生活が始まる
1909	14	父から科学としての精神分析を教えられる。フロイト、クラーク大学で講演
1914	19	教師の見習い試験に合格
1918	23	父とブタベストに行く、個人分析を受けるようになる（1922年まで）
1919	24	フロイト『子どもが叩かれる』発表
1922	27	アンナ『「叩かれる」幻想と白昼夢』をウィーン精神分析協会で発表
1923	28	フロイト（67歳）に口蓋の癌が見つかり、以後33回の手術を受ける
1924	29	2度目の分析を受ける（1925年まで）
1926	31	フロイト『非医師分析の問題』を発表
1927	32	アンナ『児童分析入門』出版
1934	39	フロイト『人間モーセと一神教』を発表
1936	41	アンナ『自我と防衛機制』出版
1938	43	フロイト一家、ロンドンに亡命
1939	44	9月23日、フロイト、83歳の生涯を閉じる
1941	46	叔母ミンナの死
1944	49	『家庭なき幼児たち』出版
1946	51	英国精神分析協会、訓練コースを設定
1950	55	アンナ、クラーク大学から名誉博士号授与
1951	56	母マルタ（90歳）の死、ドロシー・バーリングラムと生活開始
1952	57	ハムステッド・クリニック開設
1960	65	メラニー・クライン（78歳）の死
1965	70	アンナ『児童期の正常と異常』刊行
1971	76	ウィーンのアパートがフロイト記念館になる
1979	84	ドロシー・バーリングラム（88歳）が亡くなる
1982	86	10月9日、アンナ永眠

すぎない。子どもの分析には教育的なからみが含まれていて、子どもがしていいこと、していけないことがわかるには、分析家が子どもにとって興味ある人の場合であって転移とは関係がない。

子どもの超自我はまだ弱く依存的であるので、児童分析の責任は子どもの養育者、つまりその子の両親にある。とはいえ、子どもに影響を与えるためには、分析家は分析の期間中、自らを子どもの自我理想に位置づけるようにしなければならない。

このようにアンナの児童分析は、子どもの自我が弱く依存的なので、教育的視点が強いものになっている。これに対して、Kleinは治療者に向ける敵意や不安を陰性転移として解釈しなければならないとし、大人と同じように分析できると主張した。

第Ⅲ部「初期の論文」の中に、アンナの分析テーマである「“叩かれる”幻想と白昼夢」(1922)がある。この論文に登場する自虐的な白昼夢をもつ15歳くらいの少女がアンナ自身である。この少女が5歳か6歳の頃、「一人の男子が、一人の大人に叩かれている」という幻想をもっていたが、しばらく後になると、「大勢の男の子たちが、大勢の大人たちに叩かれている」に変化した。大人や男の子たちが誰なのかははっきりしなかったが、罪悪感と結びついていた。

この幻想の原型は、叩く人は父親で、叩かれているのは他の兄弟、つまり父の愛情を求める際の競争相手である。それがエディプス期の罪悪感により、抑圧と肛門サディズム期への退行によって偽装化され意識に上ってくる。この幻想は、8、10歳の頃、新しい幻想を生み出し、彼女は「良い話」(nice stories)と呼んだ。それらは気持ちがよく、幸せな気分させてくれた。

良い話と叩かれる幻想は、強者と弱者がいる点では類似するが、結末が違い、幻想では叩かれることによって、白昼夢では寛大さと和解によって解決がもたらされる。最終段階は、アンナの場合、空想することから詩や小説を書くことに変化した。

## 2. 自我と防衛機制 (1936、1966改訂)

1936年はフロイトの80歳の誕生の年であり、この本は父への誕生プレゼントであった。フロイトの精神分析は無意識を探究する「イド心理学」であったが、アンナの関心は深層から表層に移り、「自我心理学」への探究になった。これは同時に、早期超自我に関心があった Klein への回答でもある。この頃のアンナは思春期に関心があり、この本は思春期を理解するための基礎を提供する。第Ⅰ部第3章「防衛機制」で、これまでよく知られている9つの防衛機制、すなわち、退行、抑圧、反動形成、分離、打消し、投影、取り入れ、自己自身への向きかえ、逆転、それに正常者がよく用いる、衝動の昇華あるいは置き換えを加えて10種類の防衛が整理された。

第Ⅲ部「防衛の2つのタイプ」にある「利他主義の形式」の章は、アンナの自己分析と関連する。投影機制は人間関係を破壊するが、逆に価値ある陽性的な人間関係をつくったり、相互の関係を強化したりする投影の形式を「利他的な譲渡」と呼ぶ。ここで自分の欲求を他人に捧げ、間接的に自分の本能の欲求を満足させる若い女教師の例が記載されている。

## 3. 家庭なき幼児たち (1939 - 1945)

アンナたちは1937年ウィーンで Jackson 保育所を開園したが、ロンドンに移って、1940年英国の友人から空襲によって家を失った子どもを救ってほしいという寄付があり、「ハムステッド戦時保育所」を設立した。1941年からはアメリカの戦争孤児里親協会から援助を受けるようになった。こうした活動もアンナの利他主義の現れといえるであろう。

本書の第Ⅰ部が月報で、1941年2月から1945年12月までの分が報告されている。入所者は、6ヵ月から5歳くらいまでの乳幼児約20名である。後半の第Ⅱ部で、アンナと Burlingham が連名で「家庭なき幼児たち：施設保育の良否」を報告している。施設が性格形成の助けとはなっ

も、子どもの内部に道徳的価値（超自我）の形成に導く過程にならないと指摘されている。施設保育の教育の成功は、保育所の大人に対して、子どもの愛着心の強さにかかっているとし、この関係が深く長続きすれば、施設児は正常な発達をし、正常な超自我を形成するという。

#### 4. 児童分析の指針（1945－1956）

アンナは1950年クラーク大学から名誉博士号が授与されて、以後アメリカでも講演するようになった。この巻で注目すべきは、クラーク大学での講演に基づいた『精神分析の発達心理学への寄与』（1951）であろう。1920年頃から精神分析学者の中にアカデミック心理学に関心を抱く人が現れ、精神分析の知見がアカデミック心理学に浸透するにつれて、心理学者が無意識の中に入ろうとして、ロールシャッハ・テストやTATのような投影法が開発された。精神分析学とアカデミック心理学との間に広大な境界領域があることは疑いない。アンナは『家庭なき幼児たち』にあるような直接観察による結果と、分析的に再構成された結果を相互にチェックする機会に恵まれた。「アカデミックな方法と精神分析研究の結合は、精神分析の領域それ自体ではなく、精神分析的方向性をもつ児童研究という付随的な領域で行われるでしょう」と述べる。

もう一つ注目すべき論文は『失うことと失われること』（1967）で、これは元々1953年に書かれてMarie Bonaparteに送られたものであり、自分の夢の分析を通して喪の仕事をしている。まず、なぜ私たちがものを失うとき、失うものは多くの持物の中でも、例外的なものであるかを問題にする。それは失った者の失った対象への同一化がおこるからであり、対象が人間である場合、一層明白になる。ところが、悲しみが苦しみだけではなく、死者との再結合によって熱中や充実を感じさせることもある。たとえば夢で、死者が現れ、生存者の注意を惹き、こちらに来てくれと嘆願し、死者が捨てられたと不平をいう。夢主は葛藤を感じ、死者との再会に喜びもあるが、同時に死者から離れて無視したいという罪悪を感じる。こうした夢の潜在内容には、対立する傾向の干渉がある。つまり、所有したい気持ちと捨てたい気持ちが同時に起こり、この例では、死者に対して忠誠でありたい望みと、生存者との新しい絆を更新しようとする望みとが置換されている。この場合、生存者の惨めさや淋しさが認められず、死者との同一化による感情が体験されている。“失われた対象”つまり捨てられた人との同一化は、子どもの頃愛されなかった幼児体験から派生していると解釈された。

#### 5. ハムステッドにおける研究（1956－1965）

本巻は、アンナがハムステッドを体系的な精神分析的研究を行う場所にして行った活動報告である。Kleinグループとの協定の結果、アンナのグループは1947年からハムステッド児童治療者養成コースを始めた。学生の個人分析、理論と技法の講義、臨床活動のスーパービジョンは、英国精神分析学会員の委員によって行われた。1952年からハムステッド児童治療クリニックが活動を始め、その結果、ハムステッドでは精神分析と医学、精神分析とアカデミック心理学の境界領域における新しい研究活動が行われた。精神科医、サイコロジスト、ソーシャルワーカーなどは、携わるすべての人の「プロフィール」を記録し、ここから正常な発達を測定する方法が生まれた。

#### 6. 児童期の正常と異常（1965）

本巻で注目すべきは、第3章「子どもの正常に関する評価」である。子どもが成人との相違を示す4つの領域がある。第1に、自己中心性があげられ、対象の恒常性が獲得されるまでは、母親的人物は子どもにとっては1個の存在として知覚されていない。第2に、性的器官の未熟さが

あり、子どもには大人の性的な出来事は前性器的なことに変換される。第3に、衝動や空想に比べて二次過程の思考が弱い。第4に、各年齢段階によって時間評価が異なる。時間が長い短いと感じる感覚はイド、あるいは自我機能を介して測られる。

発達の順序として、精神分析理論ではリビドー段階（口唇期、肛門期、男根期、潜在期、前思春期、思春期性器性）が仮定されているが、暦の年齢段階とは大まかな一致をみるに過ぎない。攻撃欲動はさらに不正確で、リビドー段階とそれに相応する攻撃表現を関係づけているに過ぎない（例、口唇期一かむ、唾を吐く、貪り食う）。そこで、アンナたちが探究したのは、イドと自我の相互作用およびその発達レベル、イドー自我関係の年齢段階である。子どもにみられる完全な情緒的依存から大人のもつ自己信頼性、性、および対象関係の成熟に至る組み合わせを追求したものが「発達ライン」で、以下4つの発達ラインが紹介されている。

(1) 発達ラインの原型は、「全面的依存から情緒的自己信頼と成人の対象関係へ」進むライン。その段階は、①母子のそれぞれのナルシズムで覆われた、母子一体の時期。②部分対象（Klein）の時期で、欲求充足と欲求挫折が繰り返され、対象関係が動揺する段階。③対象恒常性がわかる段階。④肛門サディズム段階で両価の関係を持つ時期。⑤エディプスの段階で、異性の親を所有する一方、異性の親を嫉妬する時期。⑥潜在期で、両親像から友人、社会集団へとリビドーが昇華される。⑦前思春期で、幼児への逆行。⑧思春期の抗争期。最終的には、性器性優位の確立によるリビドーが家族以外の異性対象に移動する。

(2) 身体的な自立に向かう発達ラインは、情緒的あるいは道徳的な自己信頼よりも早く完成されることを意味するものではない。ここには、「おしゃぶりから合理的な食事へ」進むライン、「おもらしから排泄コントロールへ」進むライン、「身体的管理に対して、無責任性から責任性へ」進むラインがある。

(3) 自己中心性から交友関係へと対象世界が進むライン。

(4) 体いじりから玩具へ、遊びから仕事へ進むライン。

以上の4つのラインは決して並行して進むわけではなく、退行や固着をみせながら、相互に絡み合いながら発達していく。発達ラインは一人一人の子どもの個人的成熟を表すが、逆にいえば、人格発達における失敗を表している。

## 7. 児童分析の訓練（1966－1970）

アンナが1971年のウィーン国際会議の前に発表した『精神分析の一専門分野としての児童分析』（1970）を紹介する。この論文の出発点は、児童分析が精神分析の中の1つの専門分野なのかという問題を抱えているところにある。児童分析は1920年代から研究が開始され、後に「精神分析の分野の拡大」と呼ばれたように、治療の対象が成人の神経症から、思春期の問題、非行や犯罪、精神病、子どもの問題、心身症へと広がった。これにより分析理論の新しい知識を増やす結果になった。ここで、アンナは児童分析を他の分野と同列に置くことはできないとし、「児童分析は、成人の分析における再構成が、正しいものであるか否かを検討する手がかりを提供できる唯一の手段として、非常に特異的な存在である」と主張する。アンナは、成人分析に携わっている者が児童分析に興味を抱き、成人分析の訓練に加えて児童分析の訓練を希望するに違いないと信じていたが、これは机上の空論だった。

そこでアンナたちは、公認の援助や支持を得ることなく「独力で」児童分析の発展のために必要な状況や研究機関を生み出す努力を長年重ねてきて、いつの日か児童分析が組織的なカリキュラムの中に組み込まれる日がくることを信じていた。アンナが設立した「ハムステッド児童治療コースおよびクリニック」は20年余の経験を積んできた。ここでの訓練は、分析協会が行う訓

練組織から分離して、児童分析に限ったものであり、1つの独立した技法として発展させ、教育してきた。つまりアンナは、「児童分析の技法の根柢を、成人分析の技法に求めようとする考えを捨てて、子どもは大人と異なっているように、その技法もまた異なったものであるはずだ」と考える。こうした努力にもかかわらず、ハムステッドは独立の機関であることから、この研修生と卒業生は児童分析から成人分析へと継続して経験を積むことが許されていない。ここは「アウトサイダー」とみなされる小さなサークルの中での活動に限定されている。

アンナは、児童分析の将来のために、国際精神分析協会が児童分析専従者にも何らかの形で資格認定を行えるように各支部に働きかけるべきだと考える。それでアンナは、ウィーン国際学会でこうした点が討論されることを期待したが、ハムステッドの訓練は公認されなかった。

#### IV. 考察

アンナの生涯を検討すると、2つの点が強烈な印象として残る。一つは、アンナは創始者の2代目でありながら、その生涯は決して安泰ではなく、半世紀にわたって Melanie Klein グループとの論争に苦しめられたことである。もう一つは、論争に疲弊したアンナが国際精神分析協会 (IPA) から距離をとって、ハムステッドで児童分析を専門化するための努力をするが、その訓練は IPA から公認されなかったことである。こうした逆境の中で、アンナは父から何を受け継いだのであろうか。

##### 1. Klein との論争の意味

Klein との論争は、アンナが『児童分析入門』を出版した 1927 年から始まった。児童分析において、Klein が陰性転移を積極的に解釈していくのに対して、アンナは子どもとの陽性の関係を重視したことから、父に対するエディプス・コンプレックスが未解決だと批判された。そこで、アンナは児童分析が成人分析と違うこと強調する一方で、フロイトが Rank の『出産外傷』(1923)の後に発表した『制止、症状、不安』(1926)を検討する。精神分析はそれまで、無意識と欲動を探究する「イド心理学」であったが、フロイトはこの論文で、自我が不安の源泉であり、防衛という用語を再び使用した。アンナの関心は Klein と戦うことよりも「自我心理学」に向け、『自我と防衛機制』(1936)を完成させた。一方、Klein は「超自我」が生後1年の終わりから2年目のはじめに発達する説を唱え、さらに「幼児の抑うつポジション」(1934)の概念を発表し、自分の理論はアンナ以上に Freudian だと主張したのである。この論争は、1946年に訓練コースに関して協定が結ばれたものの、55年にわたって、つまりアンナが亡くなるまで続いた。

英国精神分析協会はこの論争によって 1940 年代後半まで複雑に分裂し、混沌とした政界の様相を帯びた。ここで起きたことは、フロイトの遺産をめぐる、誰が正当な相続者なのかという争いである。フロイトは精神分析を創始した初期の時代、自分の理論を通すために Jung と Adler を破門にした。しかし、アンナと Klein の論争はフロイトの死後も続き、通常の科学的な学会では考えられないことであり、誰が正統なのかという宗教戦争に似ている。

フロイトは神経症と宗教の類似性を述べ、人々が不安から救いを求める神は幼児的保護を求めた父親像の投影であるとみた。土居(1967)は、「フロイトが宗教は幻想であると断ずることによって自らを宗教の教祖にまさる人類の教師として呈示したため、精神分析は疑似宗教的な機能を営むに至った」と喝破した。つまり、精神分析は宗教を信じられない現代人にとって、宗教の代理物になったというのである。彼が起こした「精神分析運動」の中に、偉大な父親になろうとする心理が無意識に働いていたと指摘したのである。

フロイトはアンナの自我理想であり、彼女も「精神分析運動のリーダー」になろうとしていたが、Klein との長い論争から、本当の「フロイトの遺産」について考えるようになった。そこで、アンナは英国精神分析協会からも IPA から離れて独立して存在する道を選んだ。

## 2. 「総合的」心理学としての精神分析学

フロイトは、父の死後、Fliess との間で行われた自己分析から『夢判断』を生み出した。アンナは、父の死後、Marie Bonaparte を相手にして、自身の夢の分析を行い、『失うことと失われること』という論文を著した。自身の夢から、死者に対して忠誠でありたい望みと、生存者との新しい絆を更新しようとする望みが解釈される。アンナは、母の死を契機にして、長く待ち望んだ Dorothy Burlingham と生活を共にし始め、父フロイトの拘束から解放される。

アメリカのクラーク大学は、1909年フロイトを招待したが、1950年にはアンナを招待して名誉博士号を授与した。父と一緒にアメリカに行きたかったアンナにとって、忘れられない記念であったに違いない。この講演は、アンナが「精神分析とアカデミック心理学との合流」を宣言したといってもよい。アンナは、父が目指したのは「総合的」心理学であって、ミステリーを解き明かすだけの理論や実践ではないと確信したのである。ここから精神病理からの解明に、正常な「発達ライン」から得られる発達病理の評価を加えたのである。ハムステッドの研究成果から、不確かな対象関係よりも観察から評価できたとき、Klein は1960年に亡くなっていた。

ウィーン国際会議が開かれた1971年、アンナが生まれ育ったウィーンのアパートが博物館になることが決まった。しかし、アンナたちがハムステッドで20年余り経験を積んできた児童分析の訓練はIPAの公認にならなかった。アンナはIPAの「アウトサイダー」だったのである。アンナは深く失望したに違いない。そこでアンナは真に父を理解できる人に精神分析の将来を託すために、膨大な父の、そして自身の手紙を公表することにした。

そもそもフロイトは、精神医学のアウトサイダーだったのではないのか。精神分析が成熟するにつれて、境界領域に魅力的な理論が生まれてきた。例をあげれば、元々アンナのサークルの人でアメリカ精神分析協会の会長だった Heinz Kohut は、IPAの会長選に挫折したからこそ、「自己心理学」を立ち上げられたのではないのか（中野，2013）。アンナから教育分析を受けてアメリカに移住した E.H. Erikson は、非医師であるがゆえに「アイデンティティ論」を提唱できたのではないのか（中野，2020）。ニューヨーク州の寒村で育った H.S. Sullivan は、ヨーロッパから移住してきた精神分析家が資格を問題にすることに嫌気をさし、精神分析と決別したからこそ「対人関係論」を展開できたのではないのか（中野，2011）。アンナはアウトサイダーが独創的な仕事をすることに気づいたのではないかと思われる。

## V. おわりに

フロイトが創始した精神分析は、娘のアンナを通して、通常の科学の発展とは違う性格を見せることになった。Young-Bruehl (1988) に言わせれば、精神分析の世界では、天才的な創始者に匹敵する人はあり得ず、創始者は後継者のスタンダードであり続ける。言い換えれば、「Newton に挑戦した Einstein はいない」。もし創始者に挑戦すれば、Jung のように、精神分析学界から離れていかねばならない。だから、Klein は自分を Freudian と言い続け、アンナと執拗に争ったのであろう。

精神分析にこのような独特な性格が生まれたのは、資格のためであろう。フロイトは、乱暴な分析を防ぐために、個人分析が精神分析家には必要であると主張して、一定の訓練を受けること

によって資格を得れば、医師であるかどうかは副次的な問題であるとした。その結果、各世代は師匠と弟子、指導者と修行者、分析者と被分析者という関係で結びつけられ、知識の伝達が閉鎖的、特異的であり、派閥を生むことになった。

精神分析が総合的理論体系をもつ臨床心理学であると同時に、一定水準の技法をもつ心理療法を目指すかぎり、科学とはいえない矛盾を抱えていくことになる。もしかすると将来、精神分析を実証的な医科学にすることによって、父フロイトの束縛から離れていく第4世代が現れるかもしれない。

## 文献

- 1) 土居健郎 (1967). フロイトの遺産. 『精神分析』, 創元社, pp238-251. (『土居健郎選集 8 精神医学の周辺』岩波書店, pp 6-18, 2000, 所収)
- 2) Freud, A. (1974). *Writings of Anna Freud, Volume I, Introduction to Psychoanalysis: Lectures for Child Analysis and Teachers 1922-1935*. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 岩村由美子・中沢たえ子 (訳) (1981). アンナ・フロイト著作集第1巻: 児童分析入門. 岩崎学術出版.
- 3) Freud, A. (1966). *Writings of Anna Freud, Volume II, The Ego and the Mechanisms of Defense (1936, revised in 1966)*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 黒丸正四郎・中野良平 (訳) (1982). アンナ・フロイト著作集第2巻: 自我と防衛機制. 岩崎学術出版.
- 4) Freud, A. (1973). *Writings of Anna Freud, Volume III, Infants Without Families: Reports on the Hampstead Nurseries 1939-1945*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 中沢たえ子 (訳) (1982). アンナ・フロイト著作集第3巻: 家庭なき幼児たち (上). 第4巻: 家庭なき幼児たち (下). 岩崎学術出版.
- 5) Freud, A. (1968). *Writings of Anna Freud, Volume IV, Indications for Child Analysis and Other Papers (1945-1956)*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 黒丸正四郎・中野良平 (訳) (1984). アンナ・フロイト著作集第5巻: 児童分析の指針 (上). 第6巻: 児童分析の指針 (下). 岩崎学術出版.
- 6) Freud, A. (1969). *Writings of Anna Freud, Volume V, Research at the Hampstead Child-Therapy Clinic and Other Papers (1956-1965)*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 牧田清志・阪本良男・児玉憲典 (訳) (1983). アンナ・フロイト著作集第7巻: ハムステッドにおける研究 (上). 第8巻: ハムステッドにおける研究 (下). 岩崎学術出版.
- 7) Freud, A. (1965). *Writings of Anna Freud, Volume VI, Normality and Pathology in Childhood: Assessments of Development 1965*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 黒丸正四郎・中野良平 (訳) (1981). アンナ・フロイト著作集第9巻: 児童期の正常と異常. 岩崎学術出版.
- 8) Freud, A. (1971). *Writings of Anna Freud, Volume VII, Problems of Psychoanalytic Training, Diagnosis, and the Technique of Therapy (1966-1970)*. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) 佐藤紀子・岩崎徹也・辻 祥子 (訳) (1982). アンナ・フロイト著作集 第10巻: 児童分析の訓練-診断および治療技法. 岩崎学術出版.
- 9) Freud, S. (1919). 'A Child is being Beaten': A Contribution to the Study of the Origin of Sexual Perversions. S.E. Vol.19. trans. Strachey, J., Hogarth Press, London, pp175-204, 1955. 高橋義孝・生松敬三 (訳) (1984): 「子どもが叩かれる」フロイト著作集, 第11巻, 人文書院, pp 7-29.
- 10) Freud, S. (1954). *The Origins of Psycho-Analysis: Letters to Wilhelm Fliess*. Basic Books, New York.
- 11) Freud, S. & Jung, C.G. (1974). *The Freud / Jung Letter: The Correspondence between SIGMUND FREUD and CARL GUSTAV JUNG*. ed. William McGuire. Mark Paterson, London. 平田武靖 (訳) (1979, 1987). フロ

イト/ユング往復書簡集(上、下)、誠信書房。

- 12) Freud, S.(1985). *The Complete Letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess, 1887-1904*. ed. Jeffrey Moussaieff Masson. Fischer Verlag Frankfurt am Main. 河田 晃(訳)(2001) :フロイト1887-1904 フリースへの手紙、誠信書房。
- 13) Jones,E.(1961). *The Life and Work of Sigmund Freud*. Basic Books. 竹友安彦・藤井治彦(訳)(1969) . フロイトの生涯。紀伊国屋書店。
- 14) 中村留貴子(2018)。アンナ・フロイト—その生涯と児童分析。大阪精神分析セミナー運営委員会編：連続講義 精神分析家の生涯と理論。岩崎学術出版社。pp41-70。
- 15) 中野明德(2009)。メラニー・クラインの心的発達論—早期の超自我とエディプス・コンプレックス。福島大学心理臨床研究, 4, 1-8。
- 16) 中野明德(2011)。H.S.サリヴァンの生涯と対人関係論。福島大学総合教育研究センター紀要,11,27-36。
- 17) 中野明德(2013)。H.コフートの自己愛論—自己心理学への展開。福島大学総合教育研究センター紀要,15, 25-34。
- 18) 中野明德(2016)。マイケル・バリントの「一次愛」論—土居健郎の「甘え」理論と比較して。別府大学大学院紀要, 18, 21-38。
- 19) 中野明德(2020)。E.H.エリクソンの人生とアイデンティティ理論。別府大学大学院紀要, 22, 31-50。
- 20) Young-Bruehl, E.(1988). *Anna Freud: A Biography*. W. W. Norton & Co, New York, London.